

【研究ノート】

なぞなぞについての覚え書

ドイツの民間なぞを中心に

木下康光

—

柳田国男はなぞなぞについて次のように言っている。「ともかくも国語の力、言葉のはたらきがどれほどまで大きいかというのを、なぞというものによって初めて知った者は多かったのである。同じ一つの物でも事でも毎日私たちが言いあらわしている形のほかに、もっとおもしろくまたは美しく、すこし考えてみてそれからわかるような言い方があったことに心づいたのは、文芸の芽ばえといってもよい。」⁽¹⁾ 私たちが子供の頃聞いた「一つ目小僧に足一本なあに」(縫針)とか「朝夕赤

「言語文化」63 463-494ページ 二〇〇四年
同志社大学言語文化学会 © 木下康光

い頭巾を着て庭を掃いているものなめだ」(鶉)といったなぞなぞは、いかにも子供にとつて新しい言葉の世界を開いてくれるものであった。そこには普段私たちが見慣れた世界とは異なる新しい世界の発見と新鮮な驚き、そしてそれをもたらす言葉への喜びがあった。日常見慣れた霧やカタツムリやマツチが「谷にいっぱい、丘にいっぱい、でもしまいに、手にいっばいも残らぬもの」(Ein Tal voll und ein Land voll, und am End iss keine Hand voll.)とか「毎日お外に出かけるけれど、ちつちつお家うすにいゐるじつ」(Alle Tage geh ich aus, / Bleibe dennoch stets zu Haus.)とか「まあ、この頭の子ビツ子びつはつす、頭をなびるとカッと燃もて出でた」(Ich bin ein kleines Männchen, / Hab' einen runden Kopf, / Und streicht man mir das Köpfchen, Gleich brennt der ganze Schopf.)と言いひ装まわれるじつ、突如、故意に対象を包み隠す言いのなぞが、隠すことによつて逆にその対象の本質を漏洩ないしは開示しなえするちつちつに思おもわれるのだ。そしてそれを引き起こすのは、言葉、あるいは文芸の力にちがいない。

このよになぞなぞは柳田の言いちつちつに文芸、とりわけ誰も知るちつちつに、子供の文芸であった。だが「節季ナンズの春ムカシ」(ナンズはなんぞ、何ぞの訛、なぞという語はこれに由来する。盆や喜のような繁忙期には短形式のなぞなぞを、正月のような農閑期には長形式の昔話をするべし(一)の意)という諺が越後にあつたように、また日待や庚申待の夜にしばしば余興としてなぞなぞ遊びが行われたと言いわれるように、なぞなぞは昔話や笑い話、あるいは諺などとともに大人も嘗あむ民間文芸の一種なのであつた。(なぞが、ときに韻律を伴つて、定式化する傾向を持つのも、諺同様、口承文芸の徴の一つだ(四)。)ドイツにおいても、たとえばヨハン・ペーター・ヘーベル(1760-1826)が編集・発行し、民衆に人気があつた『ライン地方の家庭の友』という名の曆において、なぞなぞは定番となつており、これが大人も楽しむ民間文芸に属していたこと(二)のひつこの証左とならう。(今日見られる新聞・雑誌のクロスワード・パズルはその名残と言いえよ。)

さてこれらなぞなぞを民間文芸の一つとして考察するに際し、問題となるのはその成立原理、本質もしくは特性、起源と歴史、技法、種類等々である。以下順に筆を進めることにする。

一

アリストテレスは『詩学』二二章で、「なぞは結合不可能なものを結びつけ、それでしかも現実にあるものについて語るものである」と書いている。そしてそれは比喩の使用によって起こるとしている。さらに比喩については同じ章の少し後の節で、「語のすぐれた転用(比喩)をなししる」ということは、事物のあいだに類似を洞察することにほかならない」と述べ(五)ている。すなわち本来異なる領域にあるものをなんらかの類似性アナロジーにより領域を越えて移すことである。なぞは生まれ、とアリストテレスは言うのだ。たしかに「空高く駆ける白馬の一群、でも大地に降り立つこととはない」(Hoch oben am Himmel/ Traben die Schimmel./ Eine ganze Herde./ Kommt nie auf die Erde.) (雲)や「生えたかと思つて、もう刈り取られる刈り手が下だと、畑は血を吐く」(Kaum wachst' ich wieder./ Mähst man mich schon nieder./ Macht der Schnitter es nicht gut./ So vergiebt der Acker Blut.) (雲)といったなぞなぞにおいてアリストテレスの説は妥当するようと思われる。異領域への転用をなぞなぞの成立原理と見る。このメタファー説とも言うべきものは、「働いても給金を貰えぬ下男だあれ」(Welchem Knecht giebt man keinen Lohn?) (馬鞍脱走器 Stiefelknecht)や「生えなす鬚ナリー」(Welche Bärte wachsen nicht?) (鍵の齒 [「これも比喩」] Schlüsselbart)の「くちを死ぬ」と言われるものを用いたなぞなぞが存在する。このようにしてもその有効性が裏づけられる。

(そうになると我々は新たに隠喩を思いつかなくとも、すでに無数に存在する死喩から無数のなぞを作ることができるようになる)。空港、河口、山腹、机の脚、恋の炎、あるいは尻が長い、重い、軽い、甘い、辛い、点、渋い芸、うまい話、明るい、暗い、ニユース、冷たい、温かい、人等々の死喩からもアリストテレスの理論が正しければなぞが作れる筈である。それが理論の理論たるゆえんなのだから。実際ためしに作ってみることにする。まず空港。「船が利用することのできない港」とか「水のない港」ではどうだろうか。なんとかいけそうだ。河口の場合はどうか。「ものも言わず食べもしない口」ではどうか。これだと河口以外にも山の登り口などいけそうだ。もつと限定が必要となる。恋の炎はどうか。「そこに手をかざしてもちつとも暖かくならない炎」とか「紙を近づけても燃え移らない炎」ではどうもあまりピンと来ない。かようになぞなぞを作ることには実はそんなに容易な事ではない。なぞ(謎!)は相手を惑わしながら、しかも唯一の答(迷路の出口)へと導かねばならないからだ。いくつもの解答が可能ななぞとしては失格である。それはなぞが本来闘争的・競技的な性格を持つものだからであるが、それについては後に述べる。

右に試みたように唯一の答を導くのに十分な条件を具えたなぞを作るとはそれほど容易ではない。それにはすぐれた技巧が要求される。右の例の場合、河口や恋の炎に比べて空港の方は比較的うまく行ったのは、口や炎よりも港の方が比喩の領域が限定されているからであろう。だが比喩からなぞを作るとは必ずしも容易な事業でないとは言え、技巧と工夫によって可能であることには変わりなく、その意味でアリストテレスの説は依然として説得力に富む、きわめて有力な理論たるを失わないと言えよう。

三

先に引用した同じ場所でアリストテレスは、比喩の能力とは「事物の間に類似を洞察する」能力にほかならず、それは「天賦の才」の賜物なのだと言っているが、近代ドイツ文学にとって新宗教の伝道者、もしくは洗者ヨハネのごとき（これも比喩！）役割を果たしたヘルダー（1744-1803）はこう言っている。「人間の一切の詩の根源は、あの我々の内部に存し働いているアナロジーを生み出す衝動である。」ヘルダーにとって、世界の究極的同質性の直感的認識がことばとなって表現されたものが詩にほかならないのであった。詩は世界の同質性の「再」創造的発見の喜びなのであった。「再」創造的発見と言ったのは、詩が、慣習化され曇らされた日常の眼には見えなくなっていたその同質性を、再び原初の輝きにおいて発見させるからである。それゆえ逆に、アナロジーに基づく比喩を作り出すことができる者は詩人だということになる。

領域を越えて移すとは、既成の文化秩序・体制を破壊することにほかならない。そしてそれがヘルダーの言うアナロジーの原理に基づいて行われる場合、それは世界の再分節・再創造を意味することになる。詩人が行うのはまさにそのようなことであるが、既成の制度や規範、文化慣習を知らぬ幼児の言語行動も時として詩人に似ている、いや眼曇らされぬ彼らこそ天成の詩人と言つべきかもしれない。そしてなぞなぞがとりわけ子供たちに好まれるものとなったのは理由のないことではないと思われる。というのも、なぞなぞはこの世界の不思議さに対する新鮮な驚きとことばの面白さに対するみずみずしい喜びに満ちているからである。あるいはこうしたものこそがなぞなぞを生み出したと言つべきかもしれない。カタツムリや雄鶏、カッコウ（托卵する）、コウモリ（鳥の形態をした哺乳類）、あるいは海綿や軽石など身边にあって珍しい形態や特徴

的な性質を持ったものがしばしばなその主題となるのはそのことを物語っている。火や水、光や影、あるいはこだま、さらには煙や鏡などを主題とするなぞにおいては、太古の人類の、この世界の不思議さとの出会いと発見の初心な驚きと感動の息吹すら感じ取れよう。さうさくやランプや時計や汽車がなその主題となるとき、そこには文明の新しい文物に触れた驚きと感動が働いていた筈である。そして子どもにあっては死喻すらなぞにおいて元のみずみずしい姿へと再生を遂げるのである。

秩序・体制の破壊をもたらすのは比喻の使用ばかりではない。たとえばよく知られているなぞ「足せば足すほど小さくなり／取れば取るほど大きくなるものナール」(So man mehr dazutut./ So es kleiner wird./ So man mehr davontut. So es größer wird.) (穴) においてはいわゆる 地と図の転換 が起こっているが、「穴だらけ／でも丈夫なもの」(Loch an Loch/ Und hält doch.) (網) や「食べれば食べるほど／さく残るもの」(Je mehr man davon isst./ Desto mehr bleibt übrig.) (胡桃の殻) あるいは「荷馬車一台の干草なら担えるが／縫針一本を担えぬもの」(Ich weiß etwas./ Das trägt ein Fuder Heu./ Aber keine Naimade.) (水) 等においては日常的思考にとつての矛盾がなぞに生命を与えている。すなわちそのどは日常的なものの見方が破壊され、一種の価値転倒が起こっている。このような 矛盾なぞ に出会っては、慣習的思考は当惑して機能を停止し、無効化される。そのとき情性によって営まれてきた日常の硬直した文化秩序は崩壊し、始源世界の混沌が露呈して、非日常的祝祭としての、破壊と再生のカーニバル的事態が現出するのだ。

(こつした矛盾なぞにおいてはたいてい 地と図の転換 のような仕掛け、あるいはトリックが必ず存在する。それを見抜くことがすなわちなぞを解くことになるのだが、その構成原理は推理小説ミステリのそれと同じであることに気づかされる。推理小説の嚆矢とされるポーの『モルグ街の殺人事件』において、主人公がトリックを見破って不可解な事件を解明するこ

とができたのは、彼が警察や一般の人々と違って、一切先入見を排して日常の価値観では一見些細と見えるものを重視し、固定観念と機械的で情性的な思考に囚われることがなかったからであった。(

四

今日なぞなぞは一般に子供の遊戯として行われているが、それは初めからそのようなものとしてあったのだろうか。「すべての民族は最初の形成段階においてなぞの愛好者であった」とヘルダーが言っているように、多くの古代文学においてなぞ、もしくはなぞに似たものが見出される。旧約聖書『士師記』一四章では怪力の持ち主サムソンが婚礼の宴席で出したなぞ(「食らう者から食い物が出、強い者から甘い物が出た」⁽⁷⁾)の挿話が語られているが、旧約聖書ではそのほか、シバの女王が難問(Rätselfragen)をもってソロモンの智慧を試したと伝えられている(『列王紀』上二〇章、『歴代志』下九章)。また『ダニエル書』では「このダニエルには、すべれた霊、知識、分別があつて、夢を解き、なぞ(dunkle Sprüche)を解き、難問(Gehemnisse)を解くことができます」と言われる。これらは今日言うところのなぞではむろんないが、夢のようになぞめいた言葉は個人あるいは共同体の運命を予告するものとして、なんとしても解かれねばならぬものであった。それというのも神はなぞめいた言い方でしか人間に己の意を伝えないからであった(『民数記』一一一六―八)。それゆえまたヨセフ(『創世記』三七、四〇・四一章)七頭の肥えた雌牛と七頭の痩せた雌牛(やダニエルのように夢占いをすることのできる人間は、神から特別に選ばれた神に祝福された人間なのであった。古代ギリシャではなぞめいた神の言葉は神託として巫女によって伝えられた。ヘロドトスの『歴史』は夢占いの挿話とともに多数の神託の例を後世に遺してくれている

(I-34~、47, 54, 62, 65, 66, 67, 85, 107~、II-139, 152, III-30, 57, 64~、IV-163, V-56, 92, VI-19, 77, 107, 131, VII-12~、19, 140~ (木の葉)、148, 220, VIII-77, 96, IX-33, 43)°

そもそも古代の人々にとって世界は秘密と不思議にみちていた。そのような中であって人間は生存を図るために世界を知ろうとして、怖ず怖すと、がまた逞しい好奇心をもって世界に対して観察の眼を向けたのであった。火や水のような基本要素から昼と夜の交替、霧や雪のちやうな自然現象に至るまで、「食べれば食べるほど食欲になるがノすべてを食べ尽くすと死んでしまつもの」(火)⁽⁷⁾、「往きて止まりノ柔らかくして固くノ弱くして強くノ多くして少なし」(水)⁽¹⁰⁾(*Rot. Das lauffen stat still/ das weich ist hart/ das schwach ist stark/ vill ist wenig.*)⁽¹⁰⁾「山野を越えゆく大男ノ森も湖も呑み込んでノ太陽こそえも張り合つてノただ恐いのは風ばかり」(霧)⁽¹¹⁾「羽根のない鳥が飛んで来てノ葉のない木にとまったノ口のない女がやって来てノ羽根のない鳥を食べた」(雪と太陽)⁽¹¹⁾ これらのなぞには古代の人々の眼に映じた世界の姿が新鮮な感動とともに鏝込まれているように思われる。古代オリエントに由来するとされるなぞ「一本の大いなる木ありノ十二本の太き枝にノ五十二個の巢ありノ巢ごとに七羽の鳥ありてノそれぞれ別の名があつた」(年、月、週、曜日)には宇宙樹のイメージが投影しているのかもしれない。

こうしたなぞには、世界もしくは宇宙について知ろうとした人類の企ての跡が保存されているのかもしれない。古代インドの『リグ・ヴェーダ讃歌』における「われ、汝に大地の尽きるさいはてを問わん。われ、汝に大地の臍のいつこに在るやを問はん」や「何人の能くこれを知るや、何人の能く告げ得べきや、この創造のいつこに生れ、いつこより来りしを…」⁽¹¹⁾、あるいは古代北欧の歌謡『エッタ』の中の「大地と天は最初どこから来たのか」、「人々の頭上をめぐる月と太陽はどこから来たのか」⁽¹⁴⁾などの宇宙論的・存在論的問いとも言つべきなぞめいた問答はむろん本来のなぞでないにせよ、世界の秘

密についての知に関わる点でなぞに隣接している。「この世で一番甘いもの」(眠り)、「一番豊かなもの」(大地、秋)、「一番速いもの」(思い、眼差し)、「一番強いもの」(愛、運命)などの哲学的ななぞはこの系譜に連なるものであるし、『アラビアン・ナイト』の『女奴隷タワツドツドの物語』におけるなぞ問答においては知識を問う種類のものとは本来のなぞとが混在している。^(一五)

不思議にみちた世界にあって切実に求められたのは知であつた。ト占や占星術もそこから生まれたのであつたが、古代においていち早く寓話のような知恵文学が発達したのも理由のないことではなかつた。そしてなぞなぞもまたそのような背景のもとに生まれたのにちがいない。^(一六)

五

なぞは時にまた闘争的・競技的性格を帯びることがあつた。有名な古代ギリシャの『スフィンクスのなぞ』(朝は四本足ノ昼は二本足ノ晩は三本足)の物語において、女の頭とライオンの体をした有翼の怪物スフィンクスはテーバイの町の近くを通る行人にこのなぞをかけ、答えられぬと襲いかかつて喰つていたのだが、あるときついにオイディプスによって解かれ、岩から身を投げて死んだと伝えられるが、ここではなぞは遊戯などではなく、真剣な生死を賭けた闘いにほかならなかつた。このようななぞは『首を賭けたなぞ』(Halstösungsrätsel)もしくは『Halsträtsel』と呼ばれる。古代北欧の歌謡『エッタ』では知恵比べの場面で「お前の知恵がわしに劣つたらこの館からは出さんぞ」とか「どちらが物識りか首を賭けようではないか」と言われる。^(一七) また世に名高いドイツ中世のヴァルトブルクの歌合戦においてその敗者は斬首されることに

なっていたとされるが、そのとき令名高き敬虔な歌人ヴォルフラム・フォン・エッシェンバツハは魔法使いクリングゾールの出したなぞをめぐりに解いてみせたのであった。^(一〇)

いわゆる 首を賭けたなぞ は通常なぞ話の形で語られたり、あるいは昔話のモチーフとして用いられる。その代表的なものは『グリム童話集』(『Kinder-und Hausmärchen』(KHM)と略す)に見られる。KHM 二番『Das Rätsel』は旧約『士師記』サムソンのなぞを先例とする本人以外には解きえぬ 個人体験なぞ もしくは 解けぬなぞ (一人も殺さぬに十二人殺した)、注(八)参照。アアルネ・トンソンの話型索引ではM185 謎を解けぬ王女 に分類される)によって主人公は己の生命を救うとともに王女と王国を手に入れる。解けぬなぞ はまた逆に、死刑を宣告されるなど命の瀬戸際に立たされた者(またはその妻など親族)が生殺与奪の権を握る者に対して謎かけをし、そのなぞを解き明かすのと引き換えに助命されるというストーリーにも使われる。^(一一)

KHM九四番『Die Kluge Bauernochter』では主人公の百姓娘は「着物を着ず、裸でもなく、馬に乗らず、車にも乗らず、道の中も外も通らず、わしのとこへやって来い。それができたらおまえと結婚するぞ」という王様の難題を持ち前の機知で克服して王妃に迎えられる(M1875 賢い百姓娘)。殆ど同じなぞが一五世紀ドイツのなぞなぞ集に見えるが、このような一種の 無理なぞ はすでに古代ギリシャ(「男でない男が、鳥でない鳥を見て見ず、石でない石を投げて投げなかった。」「解(すが目の去勢男が蝙蝠めがけて軽石を投げたが当たらなかった)あるいは古代インド(鬼神に対し「乾いたものによつても濡れたものによつても、石によつても木によつても、弓矢によつても剣によつても、また昼にも夜にも殺さない」と約束し、たそがれに泥で殺す)に見られたものであった。^(一二) これらは言つまでもなく難題譚としても語られる。わが国でも灰縄 や 蟻通し^(一三)、打たぬ太鼓 など^(一四)で知られるが、ここでは課された難題を解くことが個人の生命のみならず、時に

は一国の存亡をも左右するのであった。とくに後者の場合には難題・なぞは武力こそ用いぬが、知力の戦争という性格すら持つものであったと言えよう。

難題なぞは普通物語の形で、すなわち難題譚として語られ、純粋ななぞなぞの形で語られたものは比較的少ないのであるが、ジムロックの編集したなぞなぞ集から実例として二つだけ挙げておく。「どつすれば水を箆せりで運ぶことができるか」「水を凍らせる。」「袋一杯の小麦粉を同じ大きさの袋二杯にするにはどつすればよいか（袋を二重にする）⁽¹¹¹⁾」もともとこれらはすでに頓智の領域に近づいている。

KHM一五二番『Das Hirtenbübchen』はまさにその頓智話の趣を呈している。ここで出される「海の水は何滴か」、「空には星がいくつあるか」、「永劫は何秒か」という問いは、ドイツでは二三世紀に書かれた『司祭アーミス』や一六世紀の民衆本『ティル・オイレンシュピーゲル』にもその類話が見られ、解答不可能な難問に対しては解答の前提条件となる実現不可能な要求を逆に相手に突き付けることで切り返す（たとえば「海の水は何滴か」に対して「流れ込む川の水を止めよ。そうすれば数える」など）このタイプの話については、ボルテーパー力の『グリム童話集注釈』に詳しい（アアルネ・トンプソンの話型索引ではMT922 皇帝と僧院長 に分類）。これらの難問は通常頓智による竹籠しんご返しのな反対要求で切り抜けられるのであるが、問いの多くが「大地の中心はどこか」、「天の大きさは?」、「アダム以来何日経ったか」など本来宇宙論的・哲学的な性質のものであることが注意を引く。『アラビアン・ナイト』の『女奴隷タワッドドの物語』においてモイスマ教の信仰と教義にかかわる宗教的問答がなぞ問答とともに交されたのであるが、今日伝わるなぞなぞにもキリスト教の力テキズムの名残を留めると思われるものが多数存するのである。たとえば「ノアの方舟に絶対乗っていなかった動物なあに（魚）とか」「神は天にもおられず地上にもおられなかったときどこにおられたか（ロバに乗っていた）といった無邪気で微

笑を誘つようなものや、「パウロはなぜコリント人に宛てて手紙を書いたか（そこにいなかったから）」といった肩透かしを喰わせるジョーク的なもののほかに、「神は天で何をしておられるか（高いものを低め、低いものを高める）」とか、「神はどれほど大きいか（天と地ほど）」、「死んだけれど生まれなかつた人は？」（アダムとイヴ）、「全世界の4分の1の人間を殺した者は？」（カイン）、「一度しか生まれなかつたのに一度死んだ人は？」（ラザロ）のようななぞはカテキズム（教理問答）を想起させる。実際なぞはキリスト教の初期の時代から宗教教育の中で、さらには人文主義の時代には諺とともに教養教育とラテン語教育の教材として、また啓蒙主義の時代には寓話などとともに子供たちに愉しい教育手段として利用されたのであつた。^(一四)そしてこれらの宗教問答的ななぞや学校教育の教材としてのなぞが世俗化して民間なぞと化していった可能性は十分考えられるのである。^(一五)

六

カテキズムが宗教教育の手段であるとともに、信仰の正しさを確認するための審査の手段としても用いられたように、なぞもまた知力もしくは知識を測る試験の性格を帯びていた。ヨレスは『単純形式の文芸』のなぞの項でこう書いている。「なぞの目的と使命は、なぞを出す側からすると、なぞを出された者にその閉鎖的団体への入会資格があるかどうかを試験し、入会を可能にすることにあり、他方なぞを出される側からすると、己が入会を許されるにふさわしい者であることを示すことにある。」^(一六)「ヨレスが「ヨレ」閉鎖的団体」(das Abgeschlossene)と云つて、それはフリーメーソンなどの秘密結社の「ごときものを念頭においているようであるが、それはともかくとして、なぞは確かにヨレスの言うように一種の資格試験

(Examen) なのだった。

この資格試験としてのなぞがしばしば嫁もしくは贅(とき)に後継者(選)びに利用されているのは興味深い。実際スフィンクスなのぞも結果的にそのような役割を果たすことになったし、前に見たKHM二番では主人公の若者はなぞ好きの王女を打ち負かして王女を手に入れる。KHM九四番では貧しい百姓娘が王の難題をみごとクリアして王妃に迎えられ、KHM一五二番では結婚の話はないものの、貧しい羊飼いの少年がそのみことな頓智の才によって王の養子(後継者)とされる。思い起こせばサムソンのなぞもまた婚礼の宴席で出されたのであった。わが歌垣を思わせる中世ドイツ農村における青年男女による掛け合い歌にはなぞなぞの要素が含まれていたとされるし、一九世紀においてもなおザルツブルクの鉱夫たちのもとでは、花嫁の父親と花婿の付添人との間で結婚の儀式の一つとしてなぞ解き問答が交わされたという。^(一七)『ドイツ民衆本叢書』(Die deutschen Volksbücher)の編者たるジムロックが集めた『ドイツなぞなぞ集』(一八五〇年、注(一九)参照)にはRäthsellied(なぞ掛け歌)なるものも見られるが、この男女一組による各四行のなぞ問答のそれぞれの初句が「娘さん、これから出す謎当てなさい」^(一八)と当たら僕のお嫁さん」で呼びかけ、「無愛想な娘と思われませぬよう」^(一九)答えて御覧に入れまじょう」と受けて、それがそのつと繰り返されるのも、なぞと結婚の風習との結びつきの名残にちがいない。^(二〇)

資格審査(Examen)という点では隠語(シャルゴン)もまたなぞに似た働きをするものであった。符牒としての隠語は仲間であることの証であり、それゆえまた部外者にはなぞめいて見える。迂言法や婉曲語法と呼ばれるものもそれに通ぜぬ者にはなぞと感ぜられよう。死ぬ(sterben)と言いつわりに永眠する(entschlafen)とか他界する(verschneiden)は便所と言わずに手洗いや化粧室と言ったりする。「王様も歩いてひとりで行かれる所」といったユーモラスな表現もある)のがそれにあたるが、タブー領域や羞恥・不快を呼び覚ましかねぬ場面などで、直接名指すことを憚ったり明示する

のを避ける心理から生まれた表現である。だがこれらは隠語同様なぞとは言いえないであろう。今なぞの条件を考えてみると、なぞは本来誰にも答える、言い当てることのできる可能性のある、一般に開かれたものでなければならぬことがわかる。なぞは本来知識を問うものではなく、知恵、体力ならぬ知力を試すものなのだ。従って出題した本人以外には知りようのない、サムソンのなぞのごとき、個人体験なぞ、解きえぬなぞ、は本来ルール違反なのだ。なぞは誰もが知っている筈のこととをわざと言い換え（その技法については後で見る）、いわばヴェールに包んで、相手に推理や想像力などの知力を働かせて言い当てさせようとするゲームなのだ。その意味ではなぞの対象としては誰もが知っている筈の日常周辺に存するものももっとも望ましいということになろう。それゆえ「水をかけると普通は消えるものなのに、どいついつわけか燃えるのです、ナーニ」（石灰）のごとき知識が問題となるような類のものは、たとえそれがあまり特殊でなく日常周辺からのものであっても、あまりよいなぞとは言えないことになる。相手の知らぬことをなぞとして出題したのではゲームとして成り立たない。なぞはあくまで知っている筈のことの中から言い当てるものであって、そうならこそ言い当てられず降参して答を教えるもらったときの、なあんだ、とか、なるほど、という悔しさや感心して納得する感情（むろんみに言い当てたときは快哉と勝利感）を味わうことができるのだ。なぞなぞはゲーム性・競技性をその本質とするのである。そしてゲーム・競技にはルールが存するのだ。

七

なぞなぞの今日における生態はゲームもしくは遊戯としてのものである。「文化は遊びの中に生まれ、遊びとして発達し

た」と捉えるホイジンガにとつて、なぞは初め聖なる遊びであつたといふことになるが、このようなホイジンガの見解に与ると否とにかかわらず、なぞはこれまで見てきたよつに 首を賭けたなぞ や資格審査としてのなぞのように真剣な局面を呈する一方、他方においてそれ自身のうちに初めから遊戲的要素を感じていたことも否めない。我々の日常生活の中で「いいものあげましょ、当ててくらん」「食べるもの?」「甘いもの?」「丸いもの?」といった無邪気な言い当て遊びはしばしば目にされるところだが、なぞもまたそれに似て一般の言語生活の中とは遊びのひとつとして たとえば周知のことをそのままに言つことつまらなさ・芸のなさを嫌厭する心理、まさに文化の根源としての「遊び」の精神から、つまり冒頭に引用した柳田の言つ「文芸の芽ばえ」(「毎日私たちが言いあらわしている形のほかに、もつとおもしろくまたは美しく、すこし考えてみてそれからわかるような言い方」の発見)として、ごく自然に発生したるつことは想像に難くない。それゆえ、なぞは初め神話的なものであつたのがやがて競技的なものとなり、しまいは単なる遊びと化した、と考えるのでなく、その三つの機能は本来混ざり合つていたのであり、そう見ることによつてなぞはもつとも的確に性格づけられるとするパウジンガーの見解⁽¹⁾はきわめて妥当なものと見えよつ。そもそも速い昔においてどのようななぞ遊びが行われたか、それを推測する材料を我々は僅かしか持たないのである。まじめで真剣ななぞは比較的文献に保存されやすいに反し、遊び的要素の強いもの(極端な例としては猥褻ななぞ)は文献になじみにくく、口承に頼るしかないからである。またその即興性は泡沫性でもあるからだ。それゆえ文献に残つた古い時代のものにはまじめで真剣なものが多く、それにひきかえ今日ではなぞは殆ど遊戲としてしか行われなからといつて、文化史において一般に見られる世俗化の現象をそのゆえにただちになぞにも認めるとすれば、それは早計にすぎるといふことになるよつ。

他どの文芸にもまして遊びはなぞに本質的な要素であつた。その意味でなぞの三要素として詩と知と遊びを挙げるこ

ができよう。わが国では民間においてなぞが昔話と同様に退屈ばらしとして、あるいは日待ちの余興として、まさに暇潰しの娯楽として行われたこと、また平安時代には有閑貴族たちの高度な知的遊戯として謎合（謎合）が流行したこともすでに触れた。江戸末期文化年間には謎とき坊春雪（春の雪はとけやすといふので）なる者が浅草に現れ、なぞ解きの興行で人気を博したという。洒落や懸詞を好むわが国の文学的伝統の上に生まれた独特の三段なぞ（「…と掛けて…と解く。意は…」）などについては鈴木棠三の研究に詳しいが、これらはいずれもことば遊びの精神の産物にほかならなかった。そしてなぞをことばの遊戯として、あるいはゲームとして楽しむその事情はドイツ（とりあえずドイツとしておく）とて異ならなかったのである。

なぞは真剣な局面では最高度の緊張を伴う命がけのものとなってその競技性は極限にまで高まるのであるが、その対極における日常生活の中の社交遊戯としては暇潰しの娯楽なのであった。そのような場ではあまり真面目なものよりも笑いを誘うような種類のなぞ、すなわちジョークなぞが好まれたのは当然と言えよう。ドイツ一六世紀初めのなぞなぞ集に見える「ロザリオ（お数珠）の真ん中にあるのは何」（それを綴じた紐）などにはまだ多少真面目な要素も残っているが、同じなぞなぞ集の「男にとって最も有益で役に立つ女（妻）はどんな女（妻）か」（じきに死ぬ金持ちの女）になると完全にもうジョークの領域に入っている。同じジョークなぞで「人間にいちばん忠実な動物は？」（シラミ。決して自分から離れて行かない）では庶民の生活のおいがするし（ちなみにシラミは古来人気のあるなぞの主題だった）、「ソーセイジの前と後ろがわかるのはどんなときか」（肩に掛けたとき）とか、あるいは「人はなぜ酒を飲むときグラスの中をのぞきこむのか」（もしグラスの中にいたら外をのぞきたらう）においては、たとえば飲食を伴う団樂の場での社交遊戯としてのなぞなぞゲームの囁目的な即興性を認めることもできよう。そして即興性は社交的な座の文芸としての民間文芸の特質のひとつなので

あった。この即興性はとりわけ不完全ななぞ、すなわち複数あるいは多数の答の可能性を許容するなぞにおいて發揮される。たとえば「そうすればすぐそうなるが、そうしなくてもやがてそうなるもの」において「手を乾かす」が答とされているが、そのほかにも考えられそうだし、さらに「あからさまな嘘、ナニ」に対しては、そこに拳がっている「鶏が卵を身体の前(胸に)抱いている」と言つとき、鶏は卵を身体の後ろで(腹に)抱くものだから」というまことにつまらない答以外に、無数にもつと気のきいたナンセンスな答を思いつくことができよう。それに対してたとえば「はこの前の試験で百点取つたと言つた」とか、「ハンスの女房のイルゼはハンスの出張中毎晩ずっと家にいたと言つ」といつた隣人に対する当てこすりや皮肉ばかりか、政治や社会の諷刺・批判あるいは非現実な願望に至るまでわれがちにその場の人々の受けを競つた即妙の答が続出してその場の雰囲気盛り上げ、読売テレビで毎日曜夕方放映される長寿番組『笑点』を思わせるような場面が現出したことだろう。(社交の場での不完全ななぞとしてはそのほかたとえば「この世で何にいちばん用心すべきか」とか「女にはなぜ鬚がないのか」などの問い。ちなみに、居酒屋などでの社交の場で好まれそうな猥褻ななぞの好例が一六世紀の民衆本「*Leibensbuch*」に見える。そこでは宴会の場での、食い物や酒の臭いと下卑た笑いに混じつてのなぞ遊びの様子が生き生きと再現されている。わが国でも「寝ればするもの」(枕)とか「十六七の娘と掛けて 繁昌な店」と解く。意はもうけがある」など思わせぶりの猥褻ななぞ例を挙げるのに事欠かない。話が品下りしたが、酒宴の場でのなぞ掛け遊びの習慣はすでに古代ギリシヤにおいても見られたのであった。⁽¹¹⁾

ジョークなぞに多いのは肩透かしのななぞである。「ライン河でいちばん多い石はどんな石か(濡れた石)」といった罪のないものに始まり、「干し草はどこで刈るか」(どこでもない。刈るのは牧草)とか「ラッパ手はラッパを吹くときどこに立つか」(ラッパの口の前)といった人を喰つたものやら、「白い羊は黒い羊よりなぜ多く食べるか」(白い羊の方が数が多い)

のような悪戯っぽいもの、あるいは「山と谷の間にあるもの、ナニ」)と「(」のときぶざけたものに至るまで、これらは相手の真剣な思考に肩透かしを喰わせて勝を収めようとするものである。この戦法が昂すると、「一匹の犬が二匹の兎を追って一匹捕まえた。これナニ」(奇蹟が起った)とか、「目の見えぬ人が一匹の兎を見つけ、足なえの人がそれを捕まえ、裸の人がそれをポケットに入れた。これナニ」(ひとつの嘘)のときまったくナンセンスななぞすら生まれてくることになる。だがこれはもう完全なルール違反である。答のないようななぞを出すのは初めからルール違反を犯しているのであり、それではゲームが成り立たない。肩透かしは禁じ手ではないが、それはやはり逸脱形態なのであり、本来知力を競う真剣な場においてこそ、それもたまに使つから有効なのであつて、このようなものばかりが横行するとなぞ解きの醍醐味は失われ、やがて退屈な場と化してしまわざるをえない。肩透かしのなジョークなぞは、その社交性と笑いへの傾向において民間文芸の真骨頂とも言えるのだが、濫発するとかえつて興を殺ぎ、命取りとなりかねないのである。

ところが実際にはこうした類のなぞが多いのは、本来のなぞの逸脱形態であるこうしたなぞが厳格なルールに縛られぬためいくらでも作り出せるのに反し、本来的ななぞを制作するには真に創造力を必要とするからである。なぞを作る難しさはヘルダーの言うアナロジー発見と本質洞察の難しさと同じものにちがいない。なるほどと感心するような出来のよいなぞが比較的少ないのはそのためだろう。

八

本稿では民間文芸研究の一環としていわゆる「Volkstümlichkeit」(民間なぞ)を考察の対象とし、「Kunsttümlichkeit」(文学なぞ)は

ひとまずその対象からは除外される（もっとも両者はそれほど截然と区別されるわけのものでもないことは後で述べる）。

一般に複雑で長く、高い教養を必要とする文字なぞは通常読まれるべきものとして存在するのに対し、民間なぞはその逆で、一般に比較的単純で短く、しかも本来口頭でなされるものである。文字そのものは本来文字に属するものだが、いわゆる言葉なぞもまた民間なぞにおいては声によって行われる口誦なぞであった。言葉なぞもまた競技性を持った社交的な知的遊戯であるが、そこには言葉そのものへの愛とともに言葉遊びの精神が横溢している。

言葉なぞは最終的に一つ、あるいは複数の単語を言い当てるのであるが、単語は幾つかの音節から成り、また音節は通常幾つかの字母によって構成されるものであるから、言葉なぞそれ自身も字母と音節の二つの構成単位に基づく二種類に分類される。

まず一つの単語でなく一つの字母を言い当てさせるなぞとしては次のようなものがある。「フランス (Frankreich) 中にないけれどノフランス人 (Franzosen) は持っているノ女はスカート (Rocken) の中にノ男はスポン (Hosen) の中に」(«O»)、あるいは「夜 (Nacht) はじつじつで終わりノ昼 (Tag) はじつじつで始まるか」(«T») など。次に字母を操作して単語を言い当てるもので単純なものとしては「Bだと流れ、Dだと護る」(Bach川とDach屋根)、そのより複雑なものとして「頭が白いは老いの軋ゆえノ頭を取ってもまだ白いノもう一つ取っても白いまま」(Greis老人 Reism 氷またはアイスクリーム)。この後の二つのように字母の操作に依拠する文字なぞはLogographと呼ばれる。それに対し、音節単位で行われる文字なぞはハイシビはScharade (ムシャラデ) と言われる。「前は少なからずノ後は重からずノ全体で希望を与えるもノ油断は禁物」(vielleicht自分 vielは多く、leichtは軽いの意) や「一番目は喰うノ二番目は喰ふノ三番目は喰われノ全体は喰べられぬ」(Sauerkraut酢キャベツ。Sauは雌豚 erは彼 Krautは草) などがその例である。

このよつな言葉なぞの技法は早く古代・中世のラテン語において發達したものであつた。「黒い服を着て森の中にいるものノ心臓 (cor) を取るとそれは眞つ白 (comixからmix) 雪」とか、「私は君に触先と鱸のない船 (navem) を送るノ私は君に小三角柱 (melias) を送るノ解りたければひつくり返せ」(aveちうじネ、saltemお元氣で) なぢ。この字母の順を逆にしても同じ語もしくは文を生まるものをPalindromと云ふ。Ehe (結婚) Remner (年金生活者) stels (常に) などがその例だが、これを用いたなぞは少数にすぎない。Palindromはわが回文と同じ。本来純然たる言葉遊びの技法なのである。⁽¹¹¹⁾ Palindromと同じ言葉遊びの技法に属するものとしてAnagrammがある。アナグラムは一つの語または文を構成する字母の順序を入れ替えて別の語・文を生み出す技法 (語レブルドはLogographの一種。ちなみにPalindromはその特殊なもの) である。ペンネームを作るのにしばしば好まれたことはよく知られるところだが、アナグラムのなぞも少数ながら見出される。Rose (バラ) とEros (エロス) 草 (Gras) と権 (Sarg) トーラン (Koran) とハリケーン (Orkan) などのほか、ハイデルベルク (Heidelberg) を「金草」(Geld herbei) と読み解いたり、エリーザベト (Elisabeth) の名から「彼女をお留めおき下され」(Behalte sie) の意を汲み取らせるのがその例である。通時的な歴史主義言語学に対する共時的な構造主義言語学の祖とされ、記号的言語観を代表するソシュールがその晩年アナグラムに強い関心を示したと言われるが、アナグラムを始め、LogographやScharadeなど言葉遊びには単なる暇潰しの遊びにとどまらぬ。言葉の面白や、不思議への感動さらには言葉の呪力への信仰すら潜んでいゝことを見逃してはなるまい。

言葉なぞには同音異義語を用いたものもある。「我が汝の前にあるときノ汝は悦ぶノ汝が我が前にあるとき汝は恐れる」(Gericht料理 法廷)「石で造つて扉を付けるノ北方の神なれどもノ賢き人の嘲りの的」(Tür門 トール神、愚か者) なぢ。もつとも、同音異義による掛詞が撩乱と花咲くわが日本文学うちがって、ドイツ語には同音異義語そのものは極めて少なく、

その代わり同音異義の部分的利用（語全体でなく音節単位での。それゆえScharadeに似ている）が見られる。「一番おいしいくない果物は？」（Ohrligeig左手打ち。Feigはイチジク）、「昼も夜も燃えながら焼け死ぬことがないもの」（Brennesselイラクサ、brennenは燃えるの意）、「もつともよく泡を立てるビールは？」（Barbier理髪師）などである。

そのほかの技法（？）として、ナンセンスなもや強弁・こじつけによるものとは別に、主語や目的語を隠蔽や省略によつてわざとぼかした主観的もの言いのなぞも見られる。「来ると来ないが／来ないと来る／来て来ないより／来ないで来るが／いいのだけれど」（豆まきの百姓と鳩）や「わたしは見 拾い上げる／もし見ていたら 拾わなかつたらうに」（虫喰いの胡桃）などがその例であるが、これらは個人体験なぞに近い、多数の答が可能な不完全なぞと言つべきかもしれない（なお後者、虫喰いの胡桃のなぞはドイツ九世紀のなぞなぞ集にすでに見えるもので、原文はラテン語）。隠喩や擬人法についてはあらためて言つてもあるまい。

九

なぞなぞの中で独特のジャンルを成すものとして算数なぞ、あるいは計算題なぞと言われるものがある。古代北欧のなぞなぞに由来する「四つ ゆさゆさ／四つ のしのし／二つ きらきら／二つ とんがり／一つ ぶらぶら ハエを追つ」（雌牛。順に乳房、脚、目、角、尻尾のこと）という子供らしい素朴ななぞがあるが、これはまだ算数なぞ、計算題なぞとは言えない。「向こうから恐ろしい怪物がやって来る／耳が四つに／足六本／それに長い尻尾が一本／これは一体なんだろう」（馬に乗った人）にはすでに計算題の萌芽が認められよう。その原型とも言えるものが古代北欧のヘイズレク（なぞ

に見出される。「足が二〇本、目が三つ、尾が一本ある二人は誰か」(八本足の馬スレプニルとそれに乗った片目の神オーデーイン)。(三三)。「九羽の雀が木にとまっていた。一羽射ち落としたりあと何羽残っているか」(ゼロ羽。他のものは驚いて逃げる)は肩透かしのジョークなぞだが、計算題なその典型的なものはたとえば J・P・ヘーベルの編集した民衆曆に保存されている。二人の羊飼いのうち甲が乙に羊を一匹やれば乙は甲の倍になり、逆に乙が甲に一匹やれば両者の羊は同数になるという場合、二人はそれぞれ何匹持っているか、とか、ある卵売りが次々と来た客にそのつど持っている卵の半分とさらに半個を売ったところ、四人目の人に売ったところで残りは一個となったという。卵は元々何個あったか(三二個)といった類のものである。

「七人姉妹のそれぞれに一人の男兄弟がいる。全部で何人きょうだいか」(八人)や、ドイツ一六世紀初めの民間なぞなぞ集にすでに見える「二人の父親と二人の息子が三匹の兎を捕まえて、それぞれ一匹持って帰った」(祖父と父と息子)などは算数・計算題なそのようにも見えるが、古来人気のある 家族関係なぞ とも言つべき特別のジャンルに属せしめる方が適當と思われる。「この若者の母親は私の母のひとり娘です」(私は若者の母)や、ドイツ九世紀のなぞなぞでラテン語で書かれた「私が抱いているのは、私の息子の息子、私の夫の弟、私の次男たるひとり息子」(夫の死後、夫の先妻の息子と再婚した)などがその例だが、この錯綜した家族関係のモチーフもしくは素材は、ダイマル・ラケットであったか、いとし・こいしであったか、漫才のネタにも使われて現代日本の我々にも親しいものである。家族関係なぞも日常の困惑の経験から生まれたものにちがいない。それが次には演繹的に応用されてより複雑な、あるいはより洗練されたものが作られるようになっていったのだろう。その錯綜の最も極端と思われるケースは八世紀インドで書かれた『カタール・サリット・サーガラ』の中の『屍鬼二十五話』(平凡社、東洋文庫所収)の第二十四話「父が娘を、息子が母を妻にした場合」であろう(二

柱に綱付けて綱をば引かて柱をぞ引く」が元で、そこには明らかに教養文学から民間口誦文芸への、Hans Naumannの言う文化下降(Gesunkenes Kulturgut)の関係を認めることができよう。もっとも上の謎掛け歌に当時の民間なぞが反映していないという保証はないが(その可能性の方が高いだろう)。

ドイツの場合、先にも述べたように教理問答的ななぞや、人文主義や啓蒙主義時代の学校教育における教材としてのなぞが一般民衆に広まったことは十分考えられるのである。だがそうは言っても、一見教会から普及したかと思われる一六世紀ドイツの民間なぞ「コレヲ作ル者ハ コレヲ使ハズノコレヲ買フ者ハ 進ンテサウセスノコレヲ使フ者ハ ソレヲ知ラズ」(棺桶)は恐らく民間起源とされるし、^(四)九世紀のなぞなぞ集の中の有名な「雪と太陽」のなぞ(注(一)(二)(参照))のラテン語テクストの背後に、ドイツ語による頭韻を持つ原テクストの存在が推定され、„Flieg Vogel Federlos...“ (羽根のない鳥が飛んできて...)という復元の試みすらなされたのであった。^(五)マティルデ・ハインは、五世紀の末に編まれたと思われる、後世に大きな影響を与えた(たとえば古英語で書かれたExeter Bookにも)この文芸ジャンルの嚆矢とされるSymphosiusのラテン語のなぞなぞ集『なぞ百選』の主題の多くが、鍵、印章指輪、骰子、鏡、船、錨、橋、あるいはネズミ、ひきがえる、蟻、蜘蛛などの日常身の事物や動物、さらには雨、霧、雪、煙など日常生活の中の自然現象に取材したものであり、そのような主題の日常性・具象性のゆえに、文学なぞは抽象的概念を主題とする傾向があるのに対して、口頭による伝承を重視しているが、^(六)文学なぞと民間口承なぞの関係は今なおなぞめいたままと言っほかない。

注

- (一) 柳田国男『なぞとことわざ』講談社学術文庫 一四頁。
- (二) 松本孝三『説話伝承の系譜』福田晃編『民間説話』世界思想社(一九八九年)所収 一八一頁。
- (三) 東明雅『連句入門』中公新書(一九七八年)一九四頁、および乾裕幸『白石逸三』連句への招待』和泉書院(一九九五年)一九五頁
参照。
- (四) この定式化、言いかえると口碑化のおかげで、なぞは時代の貴重な証言・資料ともなっている。例えば「母にはふたたび逢ひたれども父には一度も逢はず」(唇)というなぞによつて、かつては「は」は今日と異なり〔a〕に近い発音であったことがわかるのである(鈴木棠三『なぞの研究』講談社学術文庫 一三三頁以下)
- (五) アリストテレス『詩学』中公世界の名著八『アリストテレス』三三九頁(藤沢令夫訳)
- (六) Johann Gottfried Herder Sämtliche Werke, Hrg. von B. Suphan, Georg Olms Verlag 1967, Bd. 15, S. 552ff. In: „Über Bild, Dichtung und Fabel.“
- (七) ibid., Bd. 12, S. 192. In: „Vom Geist der Ebräischen Poesie.“
- (八) これは出題した人間の個人的体験をなぞに仕立てた、本来本人以外には解きえぬなぞ。『グリム童話集』(KHM) 二二番『Das Rätsel』やその類話たる『スピンソー』、『スベイン』民話集 二二の『謎王女』(岩波文庫、二〇頁以下)は、このような 個人体験なぞとも言うべきものを題材としている。古代ギリシャの詩人ホメロスがその晩年、漁師の少年たちに出されて解くことができず憤死したといつ伝承のあるなぞに由来する「男が五匹の倍の犬と森へ狩に出かけたノ捕らえたものは放ちノ捕らえなかったものは持ち帰った」(じらみ)も、より一般性はあるにしても、これに近いものと言えるのではあるまいか。「五匹の倍の犬」とは十本の手指、「森」は言ひまでもなく鬚(じこ)。「ちなみに創作なぞ」題「はじめ白魚 しまいはスニツ」(働き者の女の指、筆者の母のちづな)。

(九) 古代エジプトでは「火は生ある動物と考えられており、手当たり次第に捕らえては食い、満腹すると食ったものとともに死滅する」と信じられていたといつ(ヘロドトス『歴史』三、三、松平千秋訳)。このなぞにはそのような古代信仰の名残が認められよう。

(一〇) このなぞは一五〇五年頃シュトラースブルクで刊行されたなぞ集に見える(レクラム版『Deutsches Rätselbuch』S.59)。だがなぞそのものはそれより遙か遠い昔に溯るにちがいない。

(一一) 「ハイズレクのなぞ」と呼ばれる古代北欧のなぞに由来するもの。柴田武編『世界なぞなぞ大事典』大修館書店(一九八四年)一六一六頁参照。

(一二) 九世紀にラテン語で書かれた『Reichenauer Rätsel』と呼ばれるなぞなぞ集に見えるものに由来する。但しラテン語版では「太陽は男性名詞(ドイツ語では女性名詞)なので、「口のない女」でなく「手のない男」となっている。レクラム版『Deutsches Rätselbuch』三〇頁参照。

(一三) ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』中公文庫(高橋英夫訳)二二五、二二六頁より引用。岩波文庫『リグ・ヴェーダ讃歌』では三〇一頁と三三三頁にあり。

(一四) 『エッタ 古代北欧歌謡集』新潮社(谷口幸男訳)四六、四七頁。

(一五) 東洋文庫『アラビアン・ナイト』一〇(平凡社)所収。

(一六) なぞめいた物言いとしての寓話もなぞなぞと無縁ではない。両者の接点を示すと思われるなぞに次のものがある。「冷たいものを温め、熱いものを冷ます。富める者も貧しき者も持つが、長く持つと年寄りになる」(息)。前半の二行は明らかにイソップ寓話の中の「人間とサテュロス」と関係していよう。なお寓話については拙稿『寓話と譬え話についての覚え書』同志社大学外国文学研究七四号(一九九六年)をも参照されたい。

(一七) 注(一四) 前掲書四五頁および四六頁。

(一八) Vgl. Mahilde Hain, Rätsel, Sammlung Metzler, 1966, S. 17f. なぞを用いた歌合戦と言え、わが国平安時代に行われたなぞなぞの歌合あはれすなわち謎合なぞあはれが思い出される。もっともこれは完全に遊戯化したものであった。詳しくは鈴木棠三『なぞの研究』四四頁以下。もしくは鈴木棠三『じよは遊び辞典』東京堂出版、九四〇頁以下を参照。

(一九) たゞしはDas deutsche Rätselbuch. Gesammelt von Karl Simrock, 1850 (Die bibliophilen Taschenbücher 1979), Nr. 463-466, 469, 470.

(二〇) シムロック版『Deutsches Rätselbuch』S. 56, Nr. 6. 「ホセマセ、馬にホ乗、ハ、ト、ハ、ン、一六世紀の民衆本」Lalebuch「ロも見、ス、」。

(二一) Johannes Bolte/Georg Polivka: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm 2, 1915 (Georg Olms AG, 1992), S. 365. なおこのホルテ・ポリフカの『グリム童話集注釈』は多数の類話や関連資料を提供してくれているが、なかでも二三世紀末に書かれたと推定される『ゲスタ・ロマノールム』二四話 半分馬に乗って および一五三話 アポロニウス伝 はKHM九四番との関連で興味深い。とりわけ後者では「誰であれ、余が提出する問題の正解を発見した者は、余の娘を妻に迎えることができる」と。ただし失敗した場合には「打首たて心得」と言われ、『ゲスタ・ロマノールム』篠崎書林 五九四頁、伊藤正義訳、個人体験なぞと首を賭けたなぞ および 聳入の難題 (トンプソンのモチーフ索引Aa-Th H310) の三つの要素が一体となっている。なお昔話におけるなぞ話についてはトンプソンの『民間説話 理論と展開』(上) 現代教養文庫 三三六頁以下をも参照。

(二二) 中務哲郎『饗宴のはじまり 西洋古典の世界から』(岩波書店 二〇〇三年) 所収『同心田の神話』参照。

(二三) Simrock注(一九) 前掲書Nr. 260, 261.

(二四) Vgl. Simrock, ibid., S. 175 (Nachwort von Hubert Göbels) u. M. Hain, ibid., S. 3f., 8f., 19, u. 44f.

(二五) Vgl. M. Hain, ibid., S. 9 u. 19.

- (一六) André Jolles: Einfache Formen. Max Niemeyer Verlag 1974. S. 136.
- (一七) Vgl. Mathilde Hain: Sprichwort und Rätsel. In: Deutsche Philologie im Aufriß. Bd. III, Erich Schmidt Verlag 1979. Sp. 2746f.
- (一八) わが国には恐のな言葉とある。大和言葉 というものがある。説経節の『信徳丸』や『小栗判官』などに多数見られるが、こゝでは暗号の「じやき」大和言葉を解することが恐の成就の条件であり、その意味では資格審査の役割を担っていたのであった。なお大和言葉 については鈴木棠三『こゝは遊び辞典』一〇二頁以下をも参照。ちなみに昔話にも歌の謎を解いてめでたく婿に迎えられる話がある。(JT24 難題婿 歌の謎)
- (一九) ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』前掲書二二八頁参照。
- (二〇) Vgl. Hermann Bausinger: Formen der „Volksprosa“, Erich Schmidt Verlag 1968. S. 128.
- (二一) 江口一久編『こゝは遊びの民族誌』大修館書店(一九九〇年)二四頁、あるいは集英社『世界文学大事典』謎の項参照。
- (二二) Palindromの文の例としては次のようなものがある: „Ein Nege mit Gazelle zag im Regen nie.“ (ガゼルを連れた黒人は雨の中を臆さぬ) わが国には「長き夜の…」で始まる有名な回文歌があるが、子供の世界でも「竹数焼けた」など回文は人気がある。「こねこや」「したぶんし」なども懐かしいが、逆さ言葉は隠語(「ドヤ」など)にも使われるが思い出される。
- なお上に見た字母の頭を取ったり、全体もしくは一部を引っくり返したりする技法はわが国のなぞなぞでもよく発達していたことは鈴木棠三に詳しい。一例のみ挙げる。「そのかみ失せし浦島帰る」(猿 ウラシマのウを取り)、「かみ失せし」ラシマを引っくり返す(「帰る」)。
- (二三)『世界なぞなぞ大事典』注(一一)前掲書二二〇頁。とこまでこれに似た同『大事典』所収のわが国のなぞ「目が三つで馬が六本」(馬に乗った丹下左膳)は、ヘイズレクのもの模倣だろうか。そこに伝播関係を認めることができるだろうか。それとも偶然

の相似だらけか。

(三四) Vgl. M. Hain, *ibid.*, S. 21 u. 29.

(三五) Vgl. M. Hain, *ibid.*, S. 4f.

(三六) Vgl. M. Hain, *ibid.*, S. 1.

小論を草するに当たって使用したなぞなぞ集は次のとおりである。

Karl Simrock: Das deutsche Rätselbuch. Die bibliophilen Taschenbücher, 1979 (1850).

Volker Schupp: Deutsches Rätselbuch. Reclam, 1985.

Johannes Gruntz: Rate, rate, was ist das. Benziger, 1975.

Kurt Brzoska: Das kleine Rätselbuch. Deutsche Volksrätsel, Insel, 1951.

Jürgen Dahl: Es steht hinterm Haus. Deutsche Rätsel, Insel, 1965.

H. M. Enzensberger: Alleleirath. Insel, 1979.

注で挙げる機会のなかったその他の参考文献および事典

鈴木堂三『「じよば遊び」中公新書（一九七五年）』

池上嘉彦『「じよばの詩字」岩波書店（一九八二年）』

織田正吉『「じょークとトリック」講談社現代新書（一九九〇年）』

山路龍天他『物語の迷宮 ミステリーの詩字』有斐閣（一九八六年）。創元ライブラリー、一九九六年）

W. Kohlschmid/W. Mohr: Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte. Walter de Gruyter, 1977.

Gero v. Wilpert: Sachwörterbuch der Literatur. Kröner, 1989.

〔蛇足〕

戦後ドイツの民俗学の革新者ヘルマン・パウジンガーはなぞの四つの種類として 事物なぞ、言葉なぞ、計算題なぞなどの 頭の体操なぞ、判し絵(隠し絵)などの 絵なぞ を挙げたあとに、これらの伝統的ななぞに連なるものとして今日のクロスワードパズルとクイズに言及している(前掲書二二五頁以下)。また『世界なぞなぞ大事典』の編者のひとり、詩人の谷川俊太郎は「現代日本のなぞなぞ」の解説で、現代におけるなぞの伝播・普及においてマスコミ・メディアの果たす役割の大きいことを強調したあと、そのような マスメディアによる「近ごろ流行のなぞなぞ」は ナンセンスなぞ、駄ジャレなぞ、いじわるなぞ、理由づけなぞ の四つに分類されることを紹介している(同書三九頁以下)。ところでこのようななぞの現代的現象・形態に詩の衰えを感じるのは筆者だけだろうか。感動のないところ詩は生まれぬ。近代化の初期にはまだ「一人はのろのろ 一人はせかせか/でも二人は道連れ/一人はほとんど止まりそつ/一人はずんずん先を行く/でもどちらもお供する/旅のことを二人に聞くと/足の短い人の方が大きなことを答えてくれる。」(時計、ドイツ)とか、「百軒長屋に釜一つ」(汽車、日本)のような新鮮な驚きと発見から生まれたなぞが作られた(筆者が子供の頃、ラジオのことを「もの言っ箱」と言われるのを漫才で聞いた記憶があるが、そこには確かに文明の利器に対する新鮮な驚きがあった)。だが今日たとえば自動車やパソコンについてなにかよいなぞが生まれただろうか。それが生まれるためには愛情や親しみがなければなるまい。詩が生まれぬのは、世界が人間にとってますます疎遠な、親しみを覚えることのできぬものとなってきていることの証ではあるまいか。

近代に入ってますます世界の商品化と貨幣化、言い換えると記号化が進行した。それは解放と自由を生み出した反面、それとともに世界はますます無機的なものとなり、デジタル化されていく。有機的世界たる自然との乖離は今や瞭然となった。そこでヘルダーの言う詩と感動の源たるアナロジー発見の力はもはや働く余地がない。だが詩の枯渇は人間精神そのものの衰退の徴にほかならぬことを思うとき、我々は今、詩の再生という課題の前に立たされていることを知る。その際、近代世界を生み出して来、今日の世界において最高善とされている自由の意味と内実をもつ一度考えてみる必要があるとす。だ。

Notizen zum Rätsel (Zusammenfassung)

Yasumitsu KINOSHITA

Das Rätsel ist eine uralte Poesie, die aus drei Elementen besteht: Wissen, Spiel und Dichtung. Beim Rätsel geht es zunächst darum, sein Wissen zu beweisen. Dabei hat es gewöhnlich den Charakter eines Wettstreites, der im extremen Fall zum sogenannten Halslösungsrätsel führt. Andererseits hat es den Charakter eines Gesellschaftsspieles, wenn es im alltäglichen Leben als Zeitvertreib gespielt wird. Die Gesellschaftlichkeit gehört übrigens zu den Eigenschaften der Volkspoesie.

Beim Rätsel wird das zu erratende Objekt verrätselt, d.h. in einer anderen Weise als im Alltag dargestellt. Zu diesem Zweck wird oft von Metaphern Gebrauch gemacht. Eine Metapher entsteht durch die Entdeckung der Analogie zwischen den Dingen im Herderschen Sinne. Die Entdeckung der Analogie wird aber nur durch die Einsicht in das Wesen des Objektes ermöglicht. Daher offenbart ein gutes Rätsel, indem es verhüllt. In einem guten Rätsel nimmt man so, wie in der Poesie, die innere Bewegung der Menschen über das Wunder der Welt als Schöpfung wahr. Es bewirkt ein frisches Erstaunen so, als ob man zum ersten Mal der Welt begegnet sei.

On German Folk-Riddles

Yasumitsu KINOSHITA

Key words: Rätsel (riddle), Volkspoesie, Spiel, wisdom, analogy